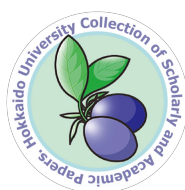




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	障害者スポーツに関する新聞報道の変容 : 競技間格差に着目して
Author(s)	山崎, 貴史; 石井, 克
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 134, 117-130
Issue Date	2019-06-27
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.134.117
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75113
Type	departmental bulletin paper
File Information	10-1882-1669-134.pdf



障害者スポーツに関する新聞報道の変容

— 競技間格差に着目して —

山 崎 貴 史*・石 井 克**

【要旨】 本論文は日本における1990年代以降の障害者スポーツの新聞報道を考察するものである。日本において、1990年代以降、障害者スポーツに関する新聞報道は増加し続けているが、こうした障害者スポーツに関する報道の増加を先行研究は肯定的に理解してきた。なぜなら、新聞報道の増加が障害者スポーツの振興・普及につながると考えられてきたためである。

それに対し、本稿は障害者スポーツの新聞報道を競技間格差に注目して分析した。具体的には、パラリンピック種目と非パラリンピック種目、とくに車椅子バスケットボールとツインバスケットボールの報道格差に着目した。

その結果、明らかになったのは以下の点である。それは1) 障害者スポーツとパラリンピックに関する新聞報道は増加傾向にあるが、2) パラリンピックに関する報道が増加するにつれ、競技間の報道量の格差が拡大していることである。したがって、障害者スポーツやパラリンピックへの社会的関心の高まりがすべての障害者スポーツにとって望ましいことではない。障害者スポーツやパラリンピックへの社会的関心が高まるにつれて、非パラリンピック種目への関心を低下させるというジレンマを含めて、障害者スポーツの普及や認知度を考えていく必要がある。

【キーワード】 障害者スポーツに関する新聞報道、パラリンピック、競技間格差

1. はじめに

本論文は日本における1990年代以降の障害者スポーツの新聞報道を考察するものである。その際、障害者スポーツの競技間の格差に着目して分析を行う。この分析を通して、我が国の障害者スポーツの新聞報道の傾向を示しつつ、障害者スポーツの普及・振興まで議論を進めていきたい。

障害者スポーツの普及・振興を新聞報道から論じる意義は、以下の点に求められる。第一に我が国におけるスポーツの普及にマスメディアが大きな役割を果たしてきた（橋本編, 2002; 黒田, 2012）ためである。第二に、いまだ障害者スポーツに直接触れる機会の少ない我が国において、パラリンピックをはじめとした障害者スポーツの認知度を高めるうえで、マスメディアが果たす役割は大きいと考えられる（蘭, 2004）ためである。2012年のロンドン・パラリンピックではテレビを中心としたマスメディアが大規模なキャンペーンを打ち出し、障害者スポーツの認知度の向上に大きく貢献したという（塩田・徳井, 2016）。2020年東京パラリンピックを控え、障害者スポーツの普及・振興において、マスメディアが果たす役割はますます大きくなっていくだろう。

* 北海道大学大学院教育学研究院・助教

** 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院博士後期課程
DOI: 10.14943/b.edu.134.117

障害者スポーツの普及・推進について、先行研究は障害者スポーツがリハビリテーションやレクリエーションではなく、スポーツとして認知されていることが重要になると指摘してきた。松尾（2005）は障害者スポーツが普及するためには、それがスポーツとしての正統性を獲得する必要があると指摘する。そして、障害者スポーツが正統性を獲得するために、(1) 障害者スポーツが現在正統であるとみなされている空間において対等かそれ以上に活躍すること、(2) パラリンピックのように障害者スポーツの独自性を示し「すごい」と認知されること、(3) 健常者が障害者スポーツに参入するリバース・インテグレーションが求められるという。また、藤田（2013）は、1990年代以降の障害者スポーツとパラリンピック報道の分析を行い、1998年の長野パラリンピックの開催がきっかけとなり、障害者スポーツの報道量が増加したことを示した。そして、1990年代以前は新聞の福祉面や社会面に掲載されていた障害者スポーツに関する記事がスポーツ面に掲載されるようになったことを明らかにし、障害者スポーツがリハビリテーションではなく、スポーツとして認知されるようになったと指摘している。これらの研究に共通するのは、障害者スポーツの振興において、障害者スポーツがスポーツとして認知されることを重要視している点である。すなわち、従来の研究は(1) パラリンピックがオリンピックから自律した領域を形成し、その独自性を示すことで、(2) 障害者スポーツ全般がスポーツとして社会的に認知され、(3) その社会的価値が高まり、(4) 障害者スポーツの普及が進むだろうという図式で説明してきた。

ところで、従来の研究が指す「障害者スポーツ」とは何なのだろうか。それはパラリンピックといったハイパフォーマンスな競技を指すのだろうか。あるいは、障害者スポーツを実践する人びととは、健常者と同等の／卓越した身体的能力を有した人びとのみを指すのだろうか。しかし、実際の障害者スポーツはその特性や参加者の身体の残存機能の点において、きわめて多様である。パラリンピック種目にも、車椅子バスケットボールといった身体の残存機能が高い人びとが参加する競技から、ウィルチェアーラグビーのような比較的障害の程度が重い人びとが参加するものもある。くわえて、ボッチャは全身性の機能障害を有する脳性麻痺者が中心となって競技が行われている。パラリンピック種目の参加者においても、残存機能が高い人びとから全身性の機能障害を有する人びとまで幅広い。

つまり、本稿で問いたいのは、障害者スポーツの振興をそれがスポーツとして認知されるという論理構成をとるならば、競技間の差異に着目して論じられるべきではないのかということである。パラリンピックがスポーツとしてみなされるようになったからといって、すべての障害者スポーツがスポーツとしてみなされるようになったと言っているのだろうか。障害者スポーツがスポーツと見なされているかどうかは、パラリンピック種目と非パラリンピック種目の違いや競技性の高低によって、大きく異なる可能性がある。そこで本稿では競技間に生じていると思われる差異を障害者スポーツの新聞報道の分析を通じて浮き彫りにする。

2. 分析の対象と方法

2-1 対象

本稿は障害者スポーツに関する新聞報道を1990年代からさかのぼって整理・検討する。1990年代以降の新聞記事を対象とする理由は、1998年長野オリンピック・パラリンピックを

契機に、障害者スポーツに関する報道が増加した（藤田, 2013）と考えられるためである。次節では新聞記事の具体的な分析を行うが、その際に障害者スポーツとパラリンピックの新聞記事の整理を行ったうえで、長野パラリンピックの影響を確認する。それを踏まえ、より詳細な分析は（1）身体障害者のスポーツと視覚障害者のスポーツ、（2）集団競技に絞って行う。その理由は以下のとおりである。まず身体障害者のスポーツを分析の中心にするのは、知的障害者のスポーツがその歴史と特性において、身体障害者のそれと大きく異なっており、また別の分析が必要なためである。知的障害者のスポーツはパラリンピックの公式競技化をめぐる、紆余曲折してきた歴史があり、本稿の分析対象外とした。次に、集団競技を分析する理由は個人競技の分析が極めて難しいためである。すべての障害者スポーツ競技を取り上げることは難しく、とりわけ、陸上や競泳といった個人競技は障害の程度や重さによって細かくクラス分けされており、記事の収集、分析および比較検討が困難である。以上の理由から、1990年代以前の新聞記事、知的障害者のスポーツに関する記事、そして個人競技については、本稿の分析対象としなかった¹⁾。

2-2 方法

障害者スポーツの新聞報道を分析した研究に、藤田（2002, 2013）、蘭（2004）と渡（2010）がある。藤田（2002）は、1998年長野パラリンピック、2000年シドニー大会と2002年ソルトレークシティー大会の新聞報道の分析を行っている。特に、新聞報道に使用された写真に着目し、「障害者の身体」が私たちの目から隠蔽されるように表象されていることを明らかにした。その一方で、藤田（2013）では、パラリンピックに関する記事がスポーツ面に掲載されるようになってきていることを明らかにしている。1964年の東京パラリンピックの報道のほとんどが社会面に掲載されていたのに対し、2000年代に入るとスポーツ面に掲載される割合が社会面を上回るようになったと結論づけている。また、蘭（2004）はソルトレークシティー大会に関する新聞報道を量的に分析し、パラリンピックをスポーツ面で報道することの重要性を指摘している。他方、渡は1964年東京パラリンピック、1998年長野パラリンピックの報道を比較分析し、パラリンピックとそこに参加する障害者がどのように表象されているかを考察した。渡によれば、1964年の東京パラリンピックの新聞報道が開会式・閉会式といったセレモニーを中心に行われていたという。それに対し、長野パラリンピックの報道ではスポーツ場面が多く用いられており、パラリンピックを「スポーツ」として表象していたと指摘している。

これらの研究は新聞報道の分析方法において異なっているが、パラリンピックを分析対象としている点では共通している。藤田がパラリンピックの新聞報道に着目するのは「メディアも障害者スポーツをスポーツとして扱うようになった」（藤田, 2013: 126）ことを示すことで、私たちが暗黙裡にもっている「障害者スポーツはリハビリテーションである」という認識の枠組みを相対化する狙いがあった。また、渡がパラリンピックの表象を分析するのは、「障害者－健常者」、「パラリンピック－オリンピック」という自明視された構造に亀裂を入れること」（渡, 2010: 245）を目指しているからだ。

本稿では藤田と渡の議論にならいつつ、「パラリンピック種目－非パラリンピック種目」や「競技性の高いスポーツ－競技性の低いスポーツ」といった階層的な関係を想定して分析を試みる。つまり、先行研究が「パラリンピック－オリンピック」という枠組みで新聞報道を

分析したのに対し、本稿は障害者スポーツ競技間の差異を明らかにしていく。以下では、障害者スポーツ報道における競技間の差異を明らかにするために、次の手順で分析を行う。

- 1) パラリンピックに関する新聞記事数の変容を整理し、障害者スポーツ報道の傾向を示す。
- 2) 車椅子バスケットボールと車椅子ツインバスケットボールに関する新聞記事数の推移を整理し、報道の競技間の差異を明示する。
- 3) パラリンピック種目それぞれの記事数を比較し、2000年代以降、どのような障害者スポーツが報道価値のあるものとして捉えられているかを示す。

なお、記事の収集は読売新聞と朝日新聞を対象として行った。それは二つが国内で第一位、第二位の発行部数を誇る新聞であるたり、多くの読者がいると想定できるためである。なお、記事の収集に関しては読売新聞記事データベース「ヨミダス歴史館」と朝日新聞記事データベース「聞蔵Ⅱ」を使用して検索を行った。その際に記事の内容を確認しながら、年毎の記事数を整理した。検索でヒットした場合でも、試合の予定が告知されているのみの記事や参加者メンバーの募集などは除外した。試合結果、競技内容や大会の詳細など、競技に関する情報や内容を伝えている記事のみを収集しカウントした。

記事の検索においては、新聞記事ごとに障害者スポーツの表記に揺れがみられるため、可能な限りすべての記事が検索できるように工夫した。例えば、車椅子バスケットボールには「車椅子バスケットボール」「車いすバスケットボール」「車椅子バスケ」「車いすバスケ」「イスバス」など、複数の表記が見られるため、すべての記事が検索できるようにワードを設定して検索している。それぞれの検索方法とワードについては、適宜明示していくこととする。

3. 障害者スポーツおよびパラリンピックに関する新聞報道の変容

3-1 パラリンピックに関する新聞記事の推移

ここでは障害者スポーツおよびパラリンピックに関する報道がどのように推移しているかを簡単に確認したい。図1は読売新聞と朝日新聞の見出しにパラリンピックという語のみが使用され、オリンピックという語が使用されていない記事数の推移を可視化したものである。見出しによる整理を行ったのは、「オリンピック・パラリンピック」という表記のもと、実際にはオリンピックのみに言及し、パラリンピックには言及していない記事を除外するためである。また、新聞記事において、パラリンピックは「パラリンピック」「パラ五輪」「身障者五輪」「障害者五輪」と表記が揺れているため、この4つの語を見出しに含む記事を収集した。

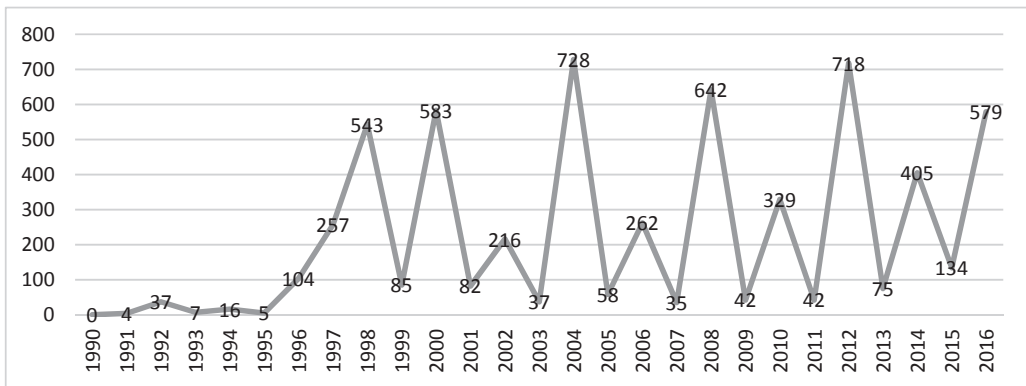


図1 見出しに「パラリンピック」という語が使用されている記事数の推移

まず1990年代以降のパラリンピックに関する新聞報道の傾向を確認していきたい。図1から明らかなように、パラリンピックに関する報道は1998年の長野パラリンピックをきっかけに大幅に増加している。1992年は夏季バルセロナパラリンピックと冬季リレハンメルパラリンピックが開催された年であるにも関わらず、37の記事しかない。パラリンピック開催年であってもわずかしかなかった新聞記事が長野パラリンピック前年の1997年に257まで増加し、98年には543の記事が書かれている。長野パラリンピック以降は、夏季パラリンピックの報道数が飛躍的に増加しているのである。夏季オリンピック開催年の記事数は、96年に104、2000年に583、2004年に728まで急増している。一方、冬季パラリンピックは競技数が少ないため、夏季パラリンピックほどの記事数はないが、冬季パラリンピック開催年の記事数も増加傾向にある。2002年に216、2006年に262、2010年に329、2014年には405の記事数が確認できた。長野パラリンピック以降、記事数は一度減少したが、冬季パラリンピックが開催されるたびに増加している。ひとまずパラリンピックに関する新聞報道の特徴は以下のように整理できる。第一に、長野パラリンピックの開催がきっかけとなり、パラリンピックに関する新聞報道がなされるようになったこと、第二にパラリンピックに関する新聞記事はパラリンピックの開催年に急増すること、第三に夏季と冬季大会で記事数の違いはあるものの、2000年代以降は安定的に記事が書かれていることである。

3-2 長野パラリンピック以降の報道の特徴

図2は「障害者スポーツ」という語が使用されている読売新聞と朝日新聞の記事数の合計の推移をまとめたものである。障害者スポーツは「障害者スポーツ」「身障者スポーツ」「障がい者スポーツ」「パラスポーツ」など語の使用に揺らぎがみられるため、これらの表記すべてを検索した。

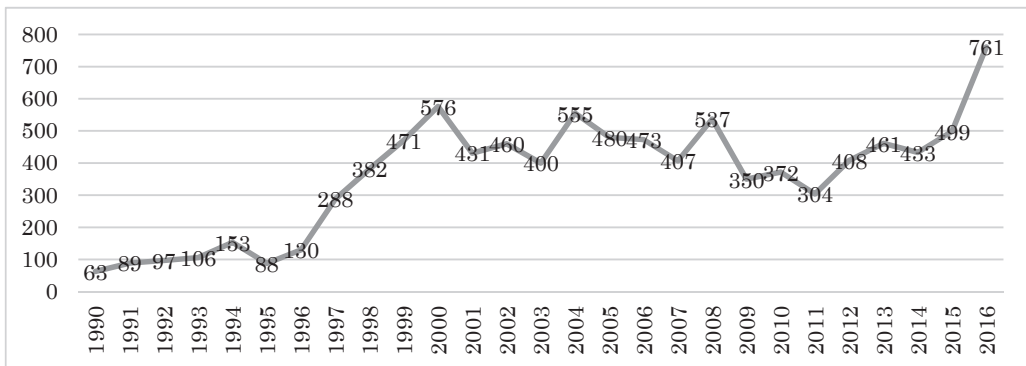


図2 「障害者スポーツ」に関する新聞記事数の推移

図2をもとに、障害者スポーツ全般に関する報道がどのように推移しているか若干の説明を加えていきたい。端的に言えば、障害者スポーツに関する新聞記事は長野パラリンピックを前後に急増している。障害者スポーツを見出しとした記事は1990年に63であったが、1998年に382まで増加し、2000年代に入ると500を超える新聞記事が書かれている。わずか8年で記事数が5倍に増加しており、長野パラリンピックがいかに大きな影響を与えたかがわかる。

パラリンピックと障害者スポーツに関する新聞報道について、ここで確認しておきたいのは以下の点である。一つは長野パラリンピック以降、パラリンピックだけでなく、障害者スポーツ全般が新聞報道されるようになったことである。ただしパラリンピックに関する新聞報道が開催年に集中するのに対し、障害者スポーツに関する新聞報道はそれ以外の年にも多く報道されるようになってきている。2000年、2004年、2008年の記事数は、ほかの年と比較してそれほど特出しているわけではない。2000年代以降は多くの記事が書かれており、障害者スポーツが恒常的に報道されている。長野パラリンピックを経験して、我が国のマスメディアは「障害者スポーツ」を語ることができるようになったと言ってよい。もう一つはパラリンピックがオリンピックから独立して報道されるようになったことである。図1は見出しに「パラリンピック」という語のみが使用され、「オリンピック」という語を使用していない新聞記事数の変容を示している。したがって、図1のパラリンピックの記事数が増加しているということは、オリンピックに言及することなくパラリンピックのみを報道する新聞記事が増加したことを示している。パラリンピックに関する報道数が増加しており、報道としての価値を獲得している。すなわち2000年代以降、我が国のマスメディアにおいて、パラリンピックはオリンピックからは相対的に自律し、そのみで報道する価値を有した独自の領域を形成し始めている。

4. 競技間の差異

4-1 パラリンピック種目と非パラリンピック種目の差異

以上のように、我が国の障害者スポーツに対する新聞報道は1998年を契機に急増し、2000年代以降はパラリンピックがオリンピックから独立して報道されるようになった。2020年の東京パラリンピック開催も含めて、パラリンピックを中心とした障害者スポーツに対する報

道価値や社会的関心が高まっているとひとまず言えよう。

以下では、「障害者スポーツ」や「パラリンピック」といった障害者スポーツ全体を包括する言葉ではなく、競技ごとの新聞報道に着目していく。以下では、まずパラリンピックの正式種目と非パラリンピック種目の新聞報道を比較検討していく。対象とするのは、車椅子バスケットボール²⁾（パラリンピック種目）と車椅子ツインバスケットボール（以下、ツインバスケットボール）³⁾（非パラリンピック種目）である。この2つを対象としたのは、いずれも車椅子型のバスケットボールであるためである。

次にパラリンピックの正式種目となっている5つの競技を対象として分析する。それは、車椅子バスケットボール、ゴールボール⁴⁾、ボッチャ⁵⁾、脳性麻痺7人制サッカー⁶⁾、ブラインドサッカー⁷⁾である。参加選手の障害の程度、我が国のパラリンピックでの成績を考慮して、この5つの競技を対象とした。

なお、各競技の特性については選手の障害の種類と程度、日本の競技レベルを中心に表1に整理した。また、表2には、これらの競技がいつパラリンピックの公式種目となったのかを整理した。

表1 競技ごとの特性

競技名	パラリンピック	障害の種類	障害の程度	競技性	日本の競技レベル
車椅子バスケットボール	正式種目	身体	軽度	高	男子 最高位7位 女子 銅メダル (2000年シドニー)
車椅子ツインバスケットボール	—	身体	重度	低	—
脳性麻痺7人制サッカー	正式種目	脳性麻痺	軽度	高	パラリンピック出場経験なし
ボッチャ	正式種目	脳性麻痺	重度	低	銀メダル (2016年リオデジャネイロ)
ゴールボール	正式種目	視覚	重度	低	女子 金メダル (2012ロンドン) 女子 銅メダル (2004アテネ)
ブラインドサッカー	正式種目	視覚	重度	低	パラリンピック出場経験なし

表2 パラリンピックの正式種目の変遷

	1960	64	68	72	76	80	84	88	92	96	2000	2004	2008	2012	2014	2016
車椅子バスケットボール	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ゴールボール					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ボッチャ							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
脳性麻痺7人制サッカー								○	○	○	○	○	○	○	○	○
ブラインドサッカー													○	○	○	○
車椅子ツインバスケットボール																

表1で注意が必要なのは、競技性の高低と障害の程度についてであろう。ここでいう競技性とは「身体能力を向上させ、技術の高度化を追求する」ことを指す。したがって、ある障害者スポーツの競技性が高いという場合、身体残存機能を向上させ、健常者と同等／それ以上の能力を目標とする志向性、そうした志向性をもった人びとが参加するスポーツを指し

ている。わかりやすい例を挙げるなら、義足のランナーが健常者と同等／それ以上の記録を目指すことがそれにあたる。そのため、障害者スポーツの競技性は参加する選手の障害の程度と大きくかかわってくる。選手の障害が重いほど、身体能力の向上と技術の高度化を目指すことが難しいためである。つまり、身体に残存機能が多い人びとが参加するほど、競技の高度化を目指すと考えられ、本稿では障害の程度を競技性の高低に反映させた。よって、競技性の高低は参加者の障害の程度を基準に設定した⁸⁾。

各競技に参加する選手の障害の程度を「重度」と「軽度」と大きく分類している。この基準をつくるにあたり、まず比較的障害の程度が軽い選手が参加するとされる車椅子バスケットボールを「軽度」とした。車椅子バスケットボールと比較して、より障害の程度が重い選手が参加するとされるツインバスケットボールを「重度」とした。車椅子バスケットボールには通常のゴールにくわえて、もう一つ低いゴールが設置されている。障害の程度が重い選手は低いゴールにシュートすることで得点を目指すことが可能となっており、より障害の程度が重い選手でも参加できるようにルールが作成されている。ツインバスケットボールにより障害の程度が重い選手が参加する傾向にあるのは、持ち点制からも明らかになる。車椅子バスケットボールには持ち点というルールがあり、選手には障害の程度に合わせて1.0から5.0の持ち点が付与される。障害の程度が軽い選手には大きい持ち点が付与され、障害の程度が重い選手には低い持ち点が付与される。そして、チームは5人の出場選手の持ち点の合計が14.5以内になるようにメンバーを構成する必要がある。一方、ツインバスケットボールにも車椅子バスケットボールと全く同じ持ち点というルールがあるが、この競技では5人の出場選手の持ち点の合計が11.5以内になるようにメンバーを構成することが決められている。すなわち、選手5人の合計持ち点が低く設定されているツインバスケットボールは、障害の程度が重い選手が参加することを想定していると言える。また、脳性麻痺7人制サッカーは車椅子などの特別な用具を使用せず健常者が行うサッカーとほとんど変わらないために「軽度」、ボッチャは全身性の障害を有する選手が参加可能なことから「重度」とした。視覚障害者スポーツに関しては、どちらもアイマスクをつけて全盲の状態で行うため、「重度」とした。

この点を踏まえて、車椅子バスケットボールとツインバスケットボールの記事数の推移について確認していく。

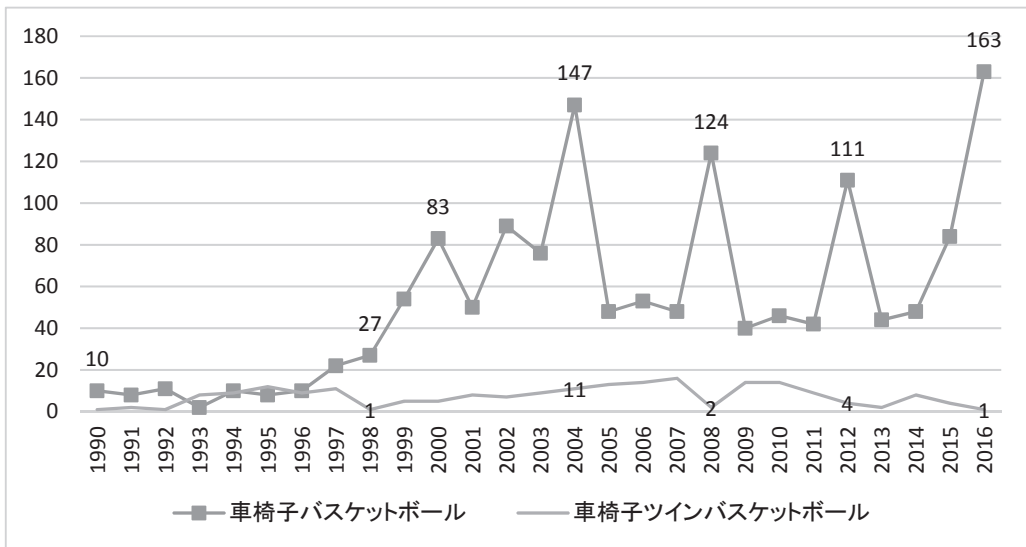


図3 車椅子バスケットボールと車椅子ツインバスケットボールの記事数の推移

図3は二つの車椅子バスケットボールに言及があった記事数の推移である。ここから明らかなように、パラリンピック種目である車椅子バスケットボールと非パラリンピック競技であるツインバスケットボールの記事数には大きな差異がある。パラリンピックに関する報道が最も多かった2004年でみると、車椅子バスケットボールに言及した記事が147あるのに対し、ツインバスケットボールに言及した記事はわずか11である。2016年にいたっては、車椅子バスケットボールに言及した記事数が163、ツインバスケットボールに言及した記事数が1とあまりにも大きな違いがみられる。後者に関しては、最も多い2007年でもわずか16の記事が書かれたにすぎない。

このように、2つの競技に言及した記事数には大きな格差がある。この格差には「パラリンピック種目＞非パラリンピック種目」「競技性が高い競技＞競技性が低い競技」という階層的な関係が反映されている。しかし、それ以上に着目したいのは、2つの車椅子バスケットボールにおいて、長野パラリンピック以前の記事数に大きな差がないことである。1993年と95年にいたっては、ツインバスケットボールの記事数のほうが多い。車椅子バスケットボールとツインバスケットボールに関する記事数の格差は長野パラリンピックの開催を契機に始まっている。2つの競技の記事数の格差の拡大は、パラリンピックに関する新聞報道の増加と平行な関係ある。このことが意味しているのは、長野パラリンピック以前には「パラリンピック種目＞非パラリンピック種目」「競技性が高い競技＞競技性が低い競技」という階層的な関係がなかったということである。ところが、長野パラリンピックが開催された1998年以降は、車椅子バスケットボールの記事数のみが増加している。つまり、長野パラリンピックの開催が車椅子バスケットボールとツインバスケットボールの関係に「パラリンピック種目＞非パラリンピック種目」「競技性が高い競技＞競技性が低い競技」という階層的な関係を持ち込んだことになる。

4-2 パラリンピック競技間の差異

以下では、4つのパラリンピック競技に関する記事数の推移を確認し、2000年代以降の障害

者スポーツに関する新聞報道を考察していく。図4はブラインドサッカーとゴールボールに言及した記事数の推移である。ブラインドサッカーとゴールボールはどちらも視覚障害者のスポーツである。

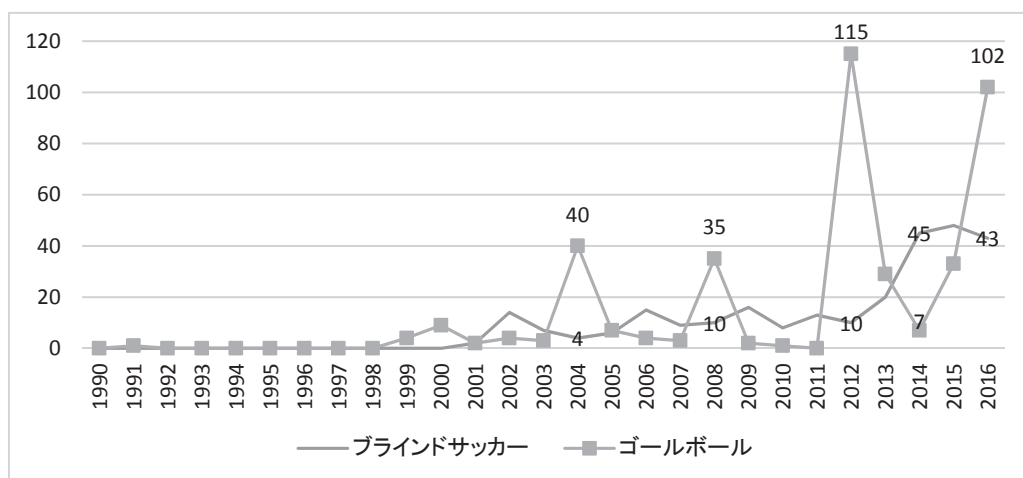


図4 ゴールボールとブラインドサッカーの記事数の推移

ブラインドサッカーとゴールボールの記事数に大きな差があるのは、ゴールボールが1980年代からパラリンピックの正式種目となっていたのに対し、ブラインドサッカーが正式種目となったのが2008年と遅いためである。また、ブラインドサッカー日本代表はパラリンピックに出場したことがなく、その点も記事の少なさに影響を与えていると言えるだろう。ゴールボールは2004年アテネ・パラリンピックで銅メダル、2012年ロンドン・パラリンピックでは金メダルを獲得しており、競技成績が記事数に大きな影響を与えている。

図5は脳性麻痺7人制サッカーとボッチャに言及した記事数の推移である。

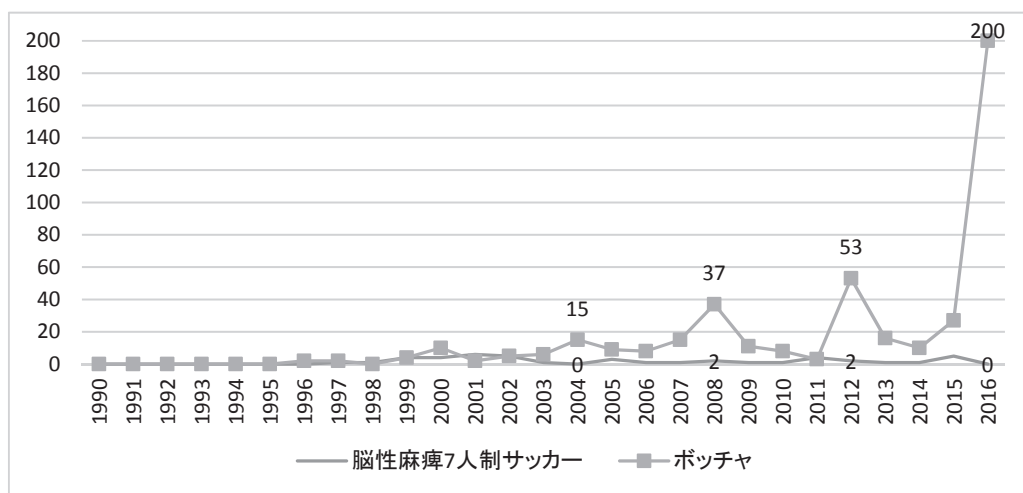


図5 脳性麻痺7人制サッカーとボッチャの記事数の推移

脳性麻痺7人制サッカーとボッチャは脳性麻痺者が行うスポーツであるという点で共通しているが、障害の程度は異なっている。脳性麻痺7人制サッカーは比較的軽度の人びとが参加するのに対し、ボッチャは全身性の機能障害を有する人びとが参加する。

図5からまずわかるのは、脳性麻痺7人制サッカーとボッチャはともにパラリンピック種目でありながら、2000年代以降の記事数に大きな差がある点である。ボッチャが2004年に15、2008年に37、2012年に53、2016年に200の記事で言及されているのに対し、脳性麻痺7人制サッカーに関する言及はほとんど見られない。その理由は脳性麻痺7人制サッカー日本代表がパラリンピックの出場権を獲得できていないためである。一方、ボッチャはパラリンピックに出場するだけでなく、2016年リオデジャネイロ・パラリンピックにおいて銀メダルを獲得している。ボッチャの記事が2016年に急増しているのはそのためである。ここで強調しておきたいのは、脳性麻痺7人制サッカーのような競技性の高いスポーツが必ずしも多く報道されるわけではないということである。反対に、競技性の低いボッチャやゴールボールが多く報道されている。当然とも言えるが、パラリンピック種目においては、競技性の高低以上に日本チームの活躍に記事数が左右されている。

その一方で、「競技性の高い>競技性の低い」「パラリンピック種目>非パラリンピック種目」という関係から逸脱した障害者スポーツの記事が増加している点にも注意したい。それは2000年代以降、新聞報道が増加しているブラインドサッカーである。それが興味深いのは、日本代表が一度もパラリンピックに出場していないにもかかわらず記事が増加していること、そしてパラリンピック開催年以外でも多くの記事が書かれていることである。ゴールボールに関する記事がパラリンピック開催年に集中しているのとは対照的である。

5. おわりに

ここまで障害者スポーツとパラリンピックに関する新聞報道の傾向を示したうえで、報道における競技間の差異を整理してきた。具体的には、車椅子バスケットボールとツインバスケットボール、脳性麻痺7人制サッカーとボッチャ、ブラインドサッカーとゴールボールの新聞記事数を比較検討した。新聞報道における競技間の差異を以下のようにまとめることができる。

第一に、1990年代の障害者スポーツに関する報道は競技間に優劣をつけていなかった。報道量において、車椅子バスケットボールとツインバスケットボールに大きな差はなく、「車椅子バスケットボール>ツインバスケットボール」という階層的な関係は見られなかった。第二に、パラリンピック種目と非パラリンピック種目の間の報道量の差は1998年の長野大会を契機に拡大している。つまり、パラリンピックの報道価値が高まれば高まるほど、パラリンピック種目に関する報道が増加し、非パラリンピック種目との格差が拡大している。この格差の拡大は、障害者スポーツに関する報道に「パラリンピック種目>非パラリンピック種目」「競技性が高い競技>競技性が低い競技」という階層的な関係が持ち込まれたことを意味する。第三に、2000年代以降は、「競技性の高い>競技性の低い」という階層的な関係が後景化し、「パラリンピック種目>非パラリンピック種目」という関係がより強化された。どの競技が多く報道されるかどうかは、競技性の高低以上に、我が国のパラリンピックにおける成績

が強く影響している。最後に、2000年代以降、ブラインドサッカーのような「競技性の高い＞競技性の低い」「パラリンピック種目＞非パラリンピック種目」どちらの関係からも逸脱した競技に関する記事が増加している。このように整理していくと、障害者スポーツに関する新聞報道がパラリンピックに強く依存していることが再確認できる。そして、パラリンピックに依存することで競技間に階層的な関係＝優劣が持ち込まれて報道量に格差を生み出していくのである。

ではこうした障害者スポーツの新聞報道とパラリンピックの依存関係をどのように考えることができるだろうか。こうした依存関係はポジティブな側面としてとらえることも可能である。ポジティブな側面としては、次の点を挙げることができる。それは障害者スポーツに関する新聞報道がパラリンピックに依存しているため、パラリンピックにおいて好成績を収めれば多くの報道を期待できる点である。ボッチャがパラリンピックで好成績を収めたことにより飛躍的に報道数を伸ばしている。銀メダルを獲得した2016年には200の報道数を記録しており、これは車椅子バスケットボールを上回り、障害者スポーツのなかで最も多かった。ボッチャは全身性の機能障害を有する人びとが参加する競技性の低いスポーツとみなされるが、好成績を収めることで社会的な関心を高めることが可能なのである。パラリンピックに依存しているということは「競技性の高い＞競技性の低い」という階層的な関係を競技成績ひとつで揺るがすことを可能にする。つまり、パラリンピックに依存しているということは、競技特性に縛られずに、競技成績によって報道量に変化するある種フェアな関係と言える。

もう一つはパラリンピックと完全な依存関係を形成していないブラインドサッカーの存在である。ブラインドサッカー日本代表はパラリンピック一度も出場していないが、2010年代以降に報道されるようになってきた。同じ視覚障害者のスポーツであるゴールボールに関する新聞報道がパラリンピック開催年に集中しているのとは対照的である。なぜ一度もパラリンピックに出場していないブラインドサッカーに対するマスメディアの関心が高まっているのだろうか。この点を考察することは、パラリンピックに依存しない障害者スポーツの振興・普及を考えるうえで大きなヒントになるだろう。「競技性の高い＞競技性の低い」「パラリンピック種目＞非パラリンピック種目」という階層的な関係から逸脱するブラインドサッカーに関する新聞報道の増加はいったい何を意味するのだろうか。ただし、数量的な分析に集中してきた本稿ではこの点を明らかにすることはできず、今後の課題としたい。ブラインドサッカーに限らず、障害者スポーツに関する新聞報道の質的な分析が求められる。

パラリンピックへの報道が増加し社会的関心が高まるにつれて、パラリンピック種目と非パラリンピック種目の間の報道格差が拡大している。そこには障害者スポーツやパラリンピックへの社会的関心が高まるにつれて、非パラリンピック種目への関心を低下させるといふジレンマがみてとれる。2020年東京パラリンピックを控える我が国では障害者スポーツ報道はパラリンピック一色になっていくだろう。こうしたパラリンピックが抱えるジレンマを含めて、障害者スポーツの今後を考えていく必要がある。

注

- 1) 本稿の分析はそうした限界はあるが、新聞報道の競技間の差異を明らかにすることが目的のため、研究の意義が失われるわけではないことを付言しておきたい。
- 2) 車椅子バスケットボールは車椅子型競技のなかでも最も歴史の古く、パラリンピックの前身である国際

ストックマンデビル大会から正式種目であった。我が国では、障害者スポーツのなかで最も人気のあるスポーツで競技人口も多い。

- 3) ツインバスケットボールは車椅子型バスケットボールの一つである。通常のゴールにくわえて、コート内には低いゴールがもう一つ設置されている。障害の程度が重い選手は低いゴールにシュートする。そのため、比較的障害の程度が重い人も参加することができる。
- 4) ゴールボールは視覚障害者のスポーツで、鈴の入ったボールを転がしてゴールへと入れる球技である。選手は全員目隠しをし、視覚の状況を同じにして競う。バレーボールと同じ広さのコートに幅9メートル、高さ1.3メートルのゴールが設置されており、ボールがゴールに入ると得点となる。1チーム3名の選手同士が相手ゴールにボールを転がすように投球しあい、また味方のゴールに相手の投球が入らないように防御する。時間内に多くのゴールを入れたチームが勝利となる。
- 5) ボッチャは目標球である白いボールにむけて、ボールを投げたり、転がしたり、他のボールに当てたりして、いかに近づけるかを競う競技である。障害によりボールを投げることができなくても、勾配具を使って投球することが認められており、脳性まひなどで全身性の障害のある人も参加できる。
- 6) 脳性麻痺7人制サッカーは比較的軽度な人びとが参加できるように工夫されたサッカーである。杖の使用は認められておらず、自走できる選手のみが参加できる。
- 7) ブラインドサッカーは視覚障害者のサッカーで選手全員がアイマスクをつけてプレイする。ゴールキーパーは目が見える人が務めるが、それ以外の選手は完全に視覚がない状態で競技を行う。相手ゴール裏にはコーラーと呼ばれる人たちがおり、選手に味方や対戦相手の位置や方向を伝える、シュートのタイミングや方向を指示するという役割を担っている。
- 8) 本稿では競技性が高い競技と低い競技に分類した。ただし、この分類は分析のために操作的に行ったものであり、筆者らは競技性の低い競技が高い競技に劣っているとは考えていない。競技間の報道量の差が競技の高低に関連しているかを明らかにするために、便宜上このような操作的な分類を使用したことを付記しておきたい。

参考文献

- 蘭 和真, 2004, 「ソルトレークシティーパラリンピックの新聞報道に関する研究—朝日新聞, 毎日新聞, 読売新聞の記事分析」『東海女子大学紀要』23, 13-19.
- 遠藤華英, 2017, 「リオデジャネイロ・パラリンピック大会に関する新聞報道の傾向分析と一考察」, 『パラリンピック研究会紀要』7, 31-40.
- 藤田紀昭, 2002, 「障害者スポーツとメディア」, 橋本純一編『現代メディアスポーツ論』.
- , 2013, 「障害者スポーツの地平」日本スポーツ社会学会編『21世紀のスポーツ社会学』, 創文企画, 124-130.
- 橋本純一編, 2002, 『現代メディアスポーツ論』, 世界思想社.
- 黒田勇, 2012, 『メディアスポーツへの招待』, ミネルヴァ書房.
- 草山 太郎, 2008, 「車椅子ツインバスケットボールの『おもしろさ』の成り立ち—プレイヤーの語りをとおりて」『追手門学院大学社会学部紀要』3, 22-50.
- 松尾哲矢, 2005, 「障害者スポーツとコミュニティ」岡田徹・高橋鉦士編『コミュニティ福祉入門—地球的見地に立った人間福祉』, 有斐閣, 169-181.
- 塩田琴美・徳井亜加根, 2016, 「障がい者スポーツにおけるボランティア参加に与える要因の検討」, 『体育学研究』61, 149-158.
- 渡 正, 2010, 「パラリンピックの表象実践と儀礼的関心」橋本純一編『スポーツ観戦学—熱狂のステージの構造と意味』, 世界思想社, 230-251.
- , 2012, 『障害者スポーツの臨界点—車椅子バスケットボールの日常的実践から』, 新評論.

Transformation of Newspaper Reports on Disability Sports: Focusing on the Gap among Disability Sport Events

Takashi YAMASAKI, Masaru ISHII

Key word

Newspaper reports on disability sports, Paralympics game, the gap among disability sport events

Abstract

This paper considers newspaper reports on disability sports in Japan since the 1990s. Newspaper report on disability sports in Japan, have been increasing since the 1990s. In preceding studies this increase has generally been interpreted positively. This is because those studies assumed that an increase in reports would raise social interest and promote disability sports.

This paper on the other hand however considers the newspaper reports on disability sports with a focus on the gap among disability sports events. Concretely, we analyzed the gap between events in the Paralympic Games and those that are not included in the Paralympics, specifically the gap between wheelchair basketball and wheelchair twin basketball.

As a result of this analysis, the following points were clarified.

1) There is a trend towards an increase of newspaper reports on disability sports and the Paralympics Games, and 2) as the reports on the Paralympic Games increase, the gap in coverage between Paralympic and non-Paralympic sports is widening. Therefore, it cannot be stated that the increased social interest in disability sports and the Paralympic Games is desirable for all disability sports.

There is a dilemma that with increasing social interest in disability sports and the Paralympic Games, the interest in non-Paralympic or non-competitive events decreases. Based on these issues, we need to create a wider awareness of disability sports in order to support their expansion.